

## 日本と世界のオーガニックマーケットの比較

南 幸信

### 日本の有機農業について

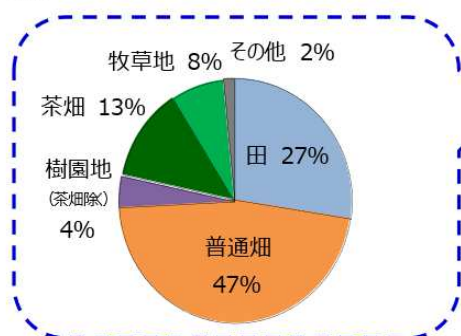
- ▶日本では、過去8年で約4割市場が拡大し、有機農業の取組面積も同程度拡大。
- ▶うち、有機JAS認証を受けている農地では、47%が普通畑、27%が田、13%が茶畑、8%が牧草地となっており、特に近年茶畑の面積が大きく拡大。

#### 日本の有機食品売上の推移

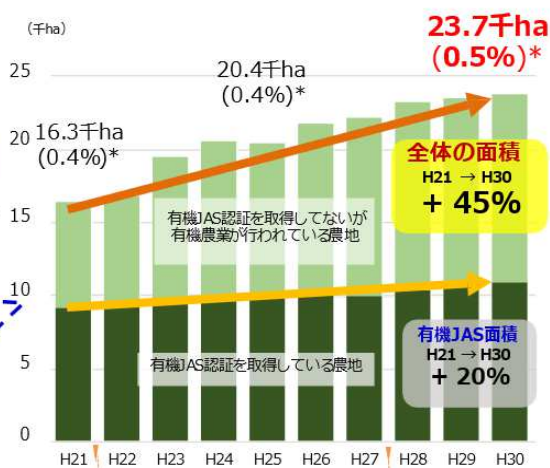
推計年度	2009年	2017年
日本全国の有機食品市場規模の推計値 (円)	1,300 億円	1,850 億円

8年で約4割拡大!

※ 2009年は、IFOAM ジャパン/オーガニックマーケットリサーチプロジェクトによる推計を、2017年は、農林水産省「有機食品マーケットに関する調査」による推計をもとに、農業環境対策課作成



#### 日本の有機農業取組面積 / 全耕地面積に占める割合



※ 有機JAS認証取得農地面積は食品製造課調べ。有機ASを取得していない農地面積は、農業環境対策課による推計 (注: 有機ASを取得していない農地面積は、H21年、22~26年、27~30年度で調査・推計方法が異なる。また、都道府県ごとにも推計方法が異なる。)

※ ※ H30年度の有機農業の取組面積にかかる実態調査 (農業環境対策課実施) の結果、複数の県で、H27年度以降の「有機ASを取得していない農地面積」が修正されたため、H30年12月より、H27年度以降の有機農業の取組面積合計値を修正。

17

日本のオーガニックマーケットの直近の動向については、上記の農水省の資料の通り、8年間で約4割増という状況です。

その内訳ですが、通常の畑つまり野菜を作る圃場が、ほぼ半分を占めていることが日本の大きな特徴です。

日本のオーガニックは野菜が牽引し、さらなる特徴は日本茶畑の伸び代です。これは抹茶ブームが背景にあり、日本のオーガニックのお茶は海外で人気となっており、この要因が拡大の一端を担っています。

日本茶は農薬の付いた葉そのものを加工するのでオーガニックが好まれ、果樹園は少ない状況です。

欧米と比べると日本の果物は古くから「水菓子」と呼ばれることから和菓子

文化として浸透しています。

色・形・光沢・味の濃厚さ 等、和菓子並みの評価を求められるところから、品種や栽培方法等、オーガニックを前提とする技術からかなり離れた環境で栽培が体系化されてきました。

優先項目が外形であり、化学農薬を使えないオーガニックの品質基準はともに対抗できず、品種や目指す品質をオーガニックによって改善するという前提で根底から取り組みを変えない限り、前途は見えてこないと考えられます。

以前、ニュージーランドのオーガニックのリンゴ園を訪問したことがあり、広大な面積をオーガニックで取り組んでいました。

なぜオーガニックに大規模に取り組めるかについては、現場を視察することでよく理解できました。

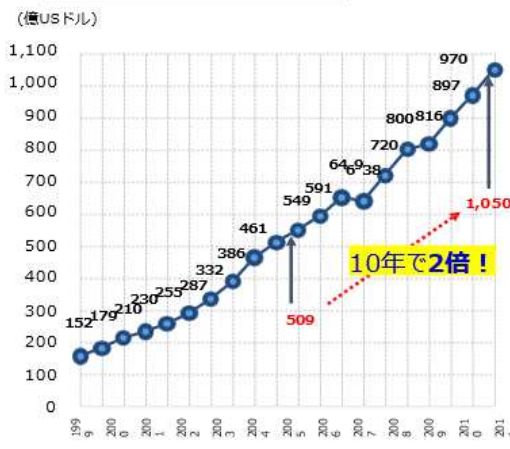
品種がアップルパイや果糖加工を前提とした酸度の強い素材を求められ、加工用で摘果も程々で、味覚重視ではなく重量重視の強い樹勢を維持し、日本のものよりは二廻りも小さい果実を出荷していました。

海外でオーガニックの果物が適度に取り組まれているのは、加工原料に向けた取り組みの結果でした。

## 世界の有機農業について

- ▶世界では、欧米を中心とした有機食品市場の拡大に伴い、有機農業の取組面積が拡大。
- ▶2018年には、71.5百万ha、全耕地面積の約1.5%で有機農業が行われている。畑や樹園地で安定的に面積が拡大するとともに、近年永年草地の拡大が顕著。

### 世界の有機食品売上の推移



### 世界の有機農業取組面積

#### 全耕地面積に占める割合



※FEB & IPOAM The World of Organic Agriculture: statistics & Emerging trends 2008 ~ 2020 をもとに、農産物対策部作成

海外のオーガニックマーケットは上記の農水省の資料のとおり、この 10 年間で約 2 倍に拡大しているという伸び率が注目に値します。

近年の食品のカテゴリーでこれほどの伸び率を示した分野はありません。

その内訳を見てみると日本と比べて特に採草地の割合が高いことが特徴です。酪農と一体化したオーガニックの取り組みという地域農業が推察できて、特に、ヨーロッパの有機基準において有機で使用できる家畜堆肥は、有機畜産です。

堆肥等の土づくりは、いわゆる「有畜複合経営」によって営まれていることになります。

対して、日本はこの採草地の割合が、たった 8%しかありません。ですので、日本のオーガニックは畜産廃棄物からの土づくりではなく、“日本の地域環境 つまり歴史的に里山と里海の持続的な資源を最大限に活用”を進める事になります。